

【鵜飼の一日】

1) 朝の世話と洗浄

鵜匠は毎朝 6 時～7 時に起床する。鵜匠は、鵜を睡眠用の籠から取り出し、のどを触ったり、翼のはばたきを見たり、様子を窺ったりすることで、それぞれの鳥の状態をチェックする。この点検作業により、鵜匠は、鳥がその日の晩の漁にふさわしい状態か否か判断する。次に、鵜は大きな囲い地に放たれる。日中は各々自由に歩き回り、入浴し、社会生活を送ることができる。この間、鵜匠は鳥が眠るエリアを掃除し、鳥の籠をゆすぎ、その後、漁具の点検、修理を行う。

2) 鵜の監督

朝から夕方まで、鵜は囲い地の中で仲間とともにリラックスして過ごす。この間、鵜匠は様々な仕事に追われているが、鳥を全く監督しないわけではない。鵜は、極めて激しい争いを起こす場合がある。鵜匠は、必要ときに争いに介入できるよう、鳴き声が聞こえる所で待機しなくてはならない。これは、鵜匠が住居の敷地内や住居近くの囲い地で鳥を飼う理由の 1 つである。

3) 鵜の選択、舟への積み込み

夜が近づく、鵜匠は鳥と器具を用意する。それぞれの鵜匠は 20 羽程度の鳥を飼っているが、毎晩、10～12 羽のみを漁に連れて行く。鵜匠は、朝の身体検査の結果や、季節、川の状態、各々の気性を考慮しながら、鳥を選択する。鵜の中には、他の鵜と比べ、生まれつき優れた漁の適性を持つものもある。しかし、優れた鳥だけを毎晩働かせていけば、速く消耗してしまう。そうならないよう、鵜匠は若さと経験の間でグループのバランスをとるように努める。選ばれた鳥は、2 羽あるいは 4 羽ずつ籠に入れられる。残された鵜は、餌をもらい、睡眠用の籠に入れられる。

毎夕 4 時頃、鵜匠に仕える船員である中乗りとともに乗りは、自らが乗る漁舟を川岸に運び込む。彼らは舟首近くの所定の位置に篝火（水の上に金属製の火の籠を保持する長い木製のポール）を取り付ける。ムクゲの枝が篝火の根元の周りに押し込まれる。葉から出た樹液が摩擦を軽減し、ポールの回転がさらに容易になる。船員はまた、漁具、鵜籠、そして松の薪の束を積み込む。鵜匠が乗り込むと、舟は上流の集合場所に向かう。

4) 集合場所で

日が暮れる頃、6 艘の鵜舟は鵜飼大橋のすぐ下の北の岸に集まる。漁師は篝火の火を起こし、最後の準備を始める。鵜匠は漁のための伝統的な衣服を身に付け、鵜を籠から取り出す。鳥の一羽一羽に、手縄と呼ばれる細い紐が結ばれる。紐の一部（腹がけ）が鵜のおなかの周りに巻かれ、もう一つの部分（首結い）が首の周りに巻かれる。鳥を傷つけないように、ちょうど良いきつさで首結いを巻く。鵜が大きい魚を飲み込めないが、小さい魚は飲み込めるようにしておくのが、ちょうど良い締め具合だ。紐を巻く強さを正確に判断することは、習得に長年の経験を必要とする技能である。

鵜匠が鳥を準備している間、鵜匠に仕える船員は舟の火の籠に火をつける。毎晩 6 人の舵

手（とも乗り）が集まり、漁業隊における舟の位置を決めるため、抽選を行う。舟は、川の中央、いずれかの岸の近く、あるいはその間のどこかに配置され得る。配置により、舟で捕れる鮎の数に大きな影響が出る場合がある。そこで、長良川の漁師は、最も良い場所を引き当てるチャンスが皆に等しく行き渡るよう保証する手段として、抽選システムを開発した。太陽が完全に沈むと、舟が出発する。

5）鵜と一緒に漁をする

鵜舟は次第に下流に向かう。この間、鵜匠は、水に入る鵜の常に重なり合う縄を管理しながら、舟の火を維持しなくてはならない。鳥が水に飛び込むと、鵜匠は、その鳥が魚に追いつけるかどうか慎重に見守る。のどが膨らんだのを合図として、鵜匠は鵜を舟に引き戻し、吐け籠と呼ばれる籠の中に魚を吐き出させる。鵜は一度に5匹もの鮎をのどに蓄えることができるが、ほとんどの場合、5匹に満たないうちに舟に戻される。鵜が魚を捕る間、鵜匠は「ホウ！ホウ！」と叫び、鵜を励ます。

舟は長良橋の手前に到達するまで、下流に進み続ける。そこで、舟は総がらみと呼ばれる夜のクライマックスのため、再編成される。舟は向きを変え、竿を使って上流に向かって少しの距離に戻る。その後、再び向きを変え、川幅に及ぶ一直線の隊列をなして橋に戻っていく。目を見張るようなこの光景が、その晩の漁を締めくくる。

6）鵜に餌をやる

船員が漁舟を岸に引き入れ、荷物を降ろし始めると、鵜匠は鵜の手縄を解き、お腹を触って、鵜が夜の間に飲み込んだ小魚の数を調べる。十分に魚を食べられていない鵜に対しては、満腹になるまで、ホッケなどの餌魚を食べさせる。その後、鵜は運搬用の籠に入れられ、小屋に返される。鵜匠が鵜を睡眠用の籠に入れ、また1日が終わろうとしている。